小池辰雄著作集　第２巻『芸術のたましい』

聖書より見たるゲーテの『ファウスト』

**＜キリストの言葉＞**

されど我は汝らに告ぐ、汝らのを愛し、汝らを責むる者のために祈れ。

これ天にいます汝らの父の子たるを、汝らせんためなり。

そは天の父は

悪しき者の上にも善き者の上にも

そのを昇らせ、

正しき者にも正しからぬ者にも、

面を降らせ給えばなり。

されば、汝らの天の父のきが如く、

汝らも全かれ。　　　　　　　──マタイ福音書第５章第44、45、48節

ファウスト（第一部）

# 【目次】

序説

　　　●神・自然・女性　●私の聖書観

ゲーテ＝ファウストの現実性

ファウストの知的欲求

# 序説

# ●ゲーテと聖書

聖書より見たるゲーテの『ファウスト』（Goethes“Faust”im Lichte der Bibel）という主題の意味は、ゲーテ生涯の大作『ファウスト』の作品自体が、その思想及び表現に於て、聖書自体がもつ思想及び表現に照らしてどのような関わりをもっているかを見ようというにある。

この主題は全『ファウスト』にわたって有機体的に論ぜらるべきものであるが、とりあえず、『第一部』の根幹的なものにふれるにとどめる。けれども第二部に於て展開円現すべき有機体的全一体の核は第一部にほぼこれを把握し予見することが出来るのであって、そこに有機体を重んじたゲーテの作品の本質が存するのである。

それ故に、さきに「思想及び表現」と申した意味も、ゲーテに於ては、思想はあたまからの思想でなく、生命の内部と深い連関をもったものであり、従って表現も言葉の素晴らしいたくみにも拘らず単なる言葉としての表現でないという質のものである。さればこそ永遠の生命に関わる現実から発した聖書の思想及びその表現とゲーテのそれとの連関を見ることは、直ちに深い内的な世界へのつらなりに関わることなのである。

ゲーテが聖書を生涯の愛読書として、これに親しんだことは周知の事実である。

「聖書を読むことは彼の全生涯を通しての随伴事であった。それは因習的な意味ではなく、彼が自ら聖書を『あらゆる書中の書』と呼んでいたように、聖書に対して全く独自の連関を有っていた。彼は聖書を極めて個人的個性的に読み、強い内的な関与を以て読んでいた。

とアルトハウスもいっている。もしゲーテの作品から聖書に源泉をもつ思想と言葉とを抜き去ったら、どんなに色せ、光を失うことであろう。否、実にゲーテの最も根幹的な生命が極めて薄弱なものとなったに相違なく、永遠的なゲーテのすがたは雲散の運命をまぬがれなかったと申すも過言でないであろう。

（１）Paul Althaus：Goethe und das Evangelium, 1951, S.6.

# ●神・自然・女性

ゲーテがその作品に於て聖書の文学的な註解を意図したのでは勿論なく、況んや説教がましいことを嫌った彼なればこそ、却って、聖書から受けとった養分を彼らしく完全消化して、これを花と咲かせ、果を実らせているのである。メタモルフォーゼ（変形、変態、転生）は、彼の植物界や動物界の観察の結果から得た法則というよりもむしろ、彼自らがその実存様式として本具していた生命の法則であったと申して可い。

さてゲーテは光の子であった。しかもゲーテにとって光は三つの具体的な実在現実を通して臨んで来た。即ち神と太陽と女性と。神の光はゲーテにとっても全聖書にあふれている「曇りなき神的啓示の光」（das Licht ungetrübter göttlicher Offenbarungとして究極的には自覚されていた。而も全く正当に彼はこの啓示の最もあらわなものである福音書とこれが全内容であるキリストの神的実存に無条件的畏敬の念をもっていた。彼はいう、

「四福音書はすべて全く真正なものと私は見る。そこには至高者の反照がはたらいている。その光は即ちキリストの人格から流れ出で、かつて地上に現われた最も神的なるものというべき神性である。」

（２）Eckermann： Gespräche mit Goethe, Reclam Ⅲ, S.262, 11. März 1832.

神の啓示の書としての聖書とその中心体であるキリストに於て神の光を見たゲーテは、また端的に、我らが接する大自然の王者である太陽を至高の神の栄光の示顕として尊び、

「私は太陽の中に見る神の光と創造力とを崇拝する。我々はすべてこれによってのみ生き、動きまた在る、植物も動物もすべて我らと共に。」

といっている。

［独文省略］

この「生き、動きまた在る」の語も、使徒行伝17･28に出ているパウロの言葉

「我らは神の中に生き、動き、また在るなり」

の語から来ている。この様な「の中に生く」といった体感的、内在的角度の把握こそゲーテ的である。しかもこれは最も聖書的な消息である。

彼の名を一躍世界的なものにしたあの『ウェルテル』の５月１０目の次のくだりは彼の全生涯の実存の秘鍵をあらわしているものといって過言でないであろう。 ［独文省略］

「茎の間の小さな世界のうごめきを、長虫や羽虫の無数の究め難い形相を心に身近に感じ、そして我々をその似姿に創りなさった全能者の現在を感じ、我々を永遠の歓喜の中に漂わせつつい且つ保ち給う一切を愛する者の息吹を感ずる。──わが友よ、さてそこで僕の眼のまわりがて周囲の世界も天空も全く僕のたましいの中に、恋人の姿のようにろうとき、僕はしばしばあこがれの念にかられて思う、ああ、これを再現できればいいなあ、紙面に息吹き込めればいいなあ、かくも満々とお前の中にあたたかく生きているものを！　お前の魂が無限の神の鏡であるようにそれがお前の魂の鏡となるように再現したいとう。」

大自然を熱愛した彼は、その草間の微細な虫の小世界のうごめき、その無数の究め難き形相を体感している。そのことは同時に人間をおのが像にって創造した全能者の現前の体感と相通ずる。そのような天然と神に相通うものは何であるか。それは

「我々を永遠の歓びのうちに漂わせつつ荷い且つ保つ一切を愛する者の息吹」

である。「一切を愛する者の息吹」（das Wehen des Alliebenden）を体感するゲーテの魂の質はその青少年時代から晩年に至るまで一貫して変らない。「一切を愛する者」が或は超越的実在としてであろうと、或は汎神的内在としてであろうと、それは所謂神学やイズムの概念規定からつねにはみ出るたちのものであった。現象と本体はつねに相入的関連、相即的現実においてされていた。「一切を愛する者の息吹」であるが故に、この「息吹」の質は即ち愛であった。それ故に神は即ち大自然にとけこみ、

「おのれの四囲の世界もさながら恋人の面影の如くにわが魂の中に安らう」

といっている。「恋人の面影」（die Gestalt einer Geliebten）という表現がおのずから発せられるところにまたゲーテの第三の光が認められるのである。

第三のものとは、即ち女性である。神の天地創造のの最後の段階が人間の創造であり、而も女性は男性の中に秘められ、蔵されていたものがあらわにされつつ創造された最後の傑作であると、かの創世記第１章（Ｐ）第２章（Ｊ）の二種の記事を読みとるなら、「一切を愛する者の息吹」は女性の本質とその姿に於いて極まると申して可である。この第三の者こそゲーテにとって、彼の生命活動、創作の全過程に於て力をあたえる源泉であった。パウロが

「男は神の、神の栄光なり、……然れど女は男の栄光なり」（コリント前書11･7）

といっている如く、一切の披造物の（Ehre）たる女性は、ゲーテにとって、神（万象の根源）─太陽（大自然の王者）─女性という系列に於て三者照応的なものであり、最も具体的な愛の源泉であり、また対象であった。パウロに於ては、

「凡ての男のはキリストなり、女の頭は男なり、キリストの頭は神なり」（コリント前書11･3）

即ち、神─キリスト─男─女という系列が表現されている。ともあれ、女性が神、自然と不可分的な存在、神的なものの栄光体として意識的にゲーテの全生涯をある方向に導き貫いた事実は、「ファウスト」の結句

“ - ”

「永遠に女性なるもの、われらを引き昇らす」

が最も雄弁に告白しているところである。

「わが魂が無限の神の鏡である」

とさきの『ウェルテル』の引用句の最後でいっている彼は、神という概念を思いこんでいるような観念論者や、観念信仰者ではなく、無限の神は、ゲーテにとって、大自然の中にとらえ、女性に於て体感する「息吹」であり「光」であり「愛」であったのである。

『ウェルテル』の冒頭の雰囲気と『ファウスト』第二部の終幕ファウスト昇天の輝かしい雰囲気とは、実に円環的な融合を示している。あらゆる暗雲、暴風雨の危険にも拘らず、光の子ゲーテ──摂理はしくも時計の両腕が中天高く輝く太陽を指し示すときに、彼を地上に送り出した──は、光より光へ、

「栄光より栄光へ」（コリント後書3･18）

と進んでやまぬ魂であった。彼の地上最後の言が「もっと光を！」（mehr Licht!）という観念の光を想っての発言ではなく、陽光を室内にさし入れたい身近かな具体性に於て表現されたのも、まことに偶然でなく、ゲーテは実にその全言動に於ていつわりなきいのちを息吹いていた実存であった、光を求めつつ、光に貫かれつつ、光を放ちつつ。

かかる光を浴びつつ生涯を突き進んだゲーテが１８３２年３月１１日、死のか１２日前にエッケルマンに語って、神の啓示につき、聖書につき、福音につき、キリストにつき、そして太陽について率直な告白をなして往生を遂げたことは、その意味極めて深きものがある。

霊界の光なる神と永遠に神的なるもの、自然界の光なる太陽と永遠に自然なるもの、人間界の光なる女性と「永遠に女性的なるもの」、この三光とそれらの事態はゲーテにとっては神の光の中に融合されて三にして一なるものとなっていた。その融合作用は実にその光がもつ熱、即ち愛によってなされていた。真に「生」を愛したゲーテは、この光と愛に於てまことの生を生きんとした。, , ！（光、愛、生）　三つのＬ。ゲーテにおける三エル（die drei-L bei Goethe）とでも申したき事態である。

ところで私はここにゲーテと『ファウスト』との関係を論ずるのではなく、人間ゲーテがその実存の血と涙と生命を以て書いた『ファウスト』そのものが、聖書の「永遠に神的なるもの」の光をどのように浴びているかを見ようとするわけである。正に「聖書の光で見たゲーテの『ファウスト』」［独文省略］なのである。しかし『ファウスト』劇の

「言葉は映像であり、象徴であって、思想や感情そのものではない。これらのものを代表しているに過ぎない。言葉の心意、意義は読者がこれを把握しなければならない。しかもこの把握はそれ自体創作的な行為であり、したがって個性的な行為である。神の霊ですら言葉の媒介を通して語らざるを得ない。言葉はどの言葉もつねに多義的である。聖書の註解がさまざまであるために、教会の分派がおこる。けれどもすべてのセクトは唯一の＜神の言＞を証拠として挙げる。……文学の分野では、もしも註解者が空想の作品を把握するのに充分空想（想像力）をもたぬ場合、また詩人から発する魂の声を聴きとるだけおのが魂が充分力をもっていないならば、知識があっても役に立たない。

とフィエトールのいう如く、言葉は所詮、象徴である。それ故に、私は、自らの無力も顧みず、詩魂の表現した言の奥の言を出来るだけつかみたいと努力する。それは併し聖書の場合に於てはいよいよ以て霊的な光によらなければならない。かくてヘブライ語で書かれた旧約聖書、コイネー・ギリシャ語で書かれた新約聖書（但しペシッタ〔アラム語聖書〕が原典という説あり）の根源語（Urwote）たる神の霊言の光を以て『ファウスト』の言葉の奥の世界を照らしこれを把握せんとするのが、私の心構えである。

（３）Karl Vietor： Goethe, S. 332.

私は『ファウスト』の中の詩句がどのようなメタモルフォーゼをなして、聖書の言を反映しているかを見るであろう。ゲーテはただ外側から聖句を借用したりはしない。いわば彼の中に消化されて、変質、変形、変貌してあらわれているか、或は表面は聖書の句のままであっても、聖句の精神をそのときの自己に即した意味あいで、これを自由に内的に使用しているのである。そして私はこの論文では聖書に関係のある個々の詩句をのこりなく挙げて研究しようとするのではなく、聖書の啓示思想がどの様にゲーテの詩句に関わりをもつかを見ようとするのである。

# ●私の聖書観

以上の様なわけであるから、ここで私が一言しなければならないことは、私の聖書観である。

我ら人類が聖書としてもつ一巻の正典は、旧新約全６６巻、多くの筆者により１５００年をも越える永きにわたって、口碑、筆記、著作、改作、いくつかの編集等さまざまの経過を辿って出来あがったもので、しかも写本また写本で、原典の原型はどのようであったか、聖書研究があらゆる角度からどのように進展しようとも、真のプンクトは永遠に打たれ得ない書である。しかもたとい研究がどのようにを極めようとも、聖書は学的研究の角度からは依然として封ぜられたる謎の書である。何ゆえに封ぜられたる謎の書であるか。聖書は人間の書であると同時に神の巻物であるからである。かく神の巻物であるところにいうまでもなくその主体性がある。換言せば、聖書は人間の思想の書ではなく神の啓示──神の意志と言説と行為──の記された書であるからである。

諸々の制約を受けた不完全な人間の書としての衣をいつつ、神の巻物として啓示の証示の書であるから、我らは聖書が語らんとしているところ、更に本質的にいうなら、聖書を通して聖書の背後から語りつつある神──聖霊に於て──の言を聴かんとする態度が要求されるのであって、我が主体となり、聖書を客体として、これを第三者として、傍観的、観察的研究対象として、これに対するならば、絶対に聖書の啓示の事態はつかめない。聖書は即ち話者であって我は応答者である。告白者である。燃えてやまぬ火の如く、流れてやまぬ水の如き聖書という熔鉱炉の中に、大海の中に、わが身を投じて、神の言に焼かれつつ、神の言に身を浸しつつ、是を体認体得せんとする態度でなければならない。日蓮が法華経を身読せよといった身読的態度である。

さて聖書はそれ自体言の海である。が聖書は教訓書や修養書ではない。これは事実の記録である。天地をその活動圈とし、天界、現実界、地獄界の三界にわたり、天地創造よりその終末の新天新地にまで貫く過、現、末の三世にわたる大歴史である。惨憺たる人類の現実（イスラエル民族を啓示の当面の対象として）に絶対次元から呼びかけ、つかみかかり、ひっぱりまわしている立体的大劇史である。それ自体救いの道なき人類の暗澹たる低次元の現実に驚くべき霊的次元からたる光を投じてこれを審判し、救済せんとする驚くべき霊的現実の開示されている書である。この救済の光体はいうまでもなくキリストである。

かかる実存的、行為的現実の展開されている書であるから、この劇中に、劇的現実の中に身を投じて劇中の人となって読むという角度でなければ、読むということは不可能なのである。人はいう、聖書は信仰の書であると。しかしその言や極めて曖昧、且つ観念的になっている。むしろ私はいう、聖書は正に一大神劇曲（オラトリウム）である。また礼拝の道場である。講堂ではない、研究室ではない。しかもそれは、勿体ぶったものでもなく、人間の一切が曝露され、ごまかしの全くきかぬ場で、聖なる霊による審判と贖罪と悔改と救済と歓喜と栄光と讃美の一大劇曲である。人間のあらゆる思想もも行為もこの中にある。しかもそれらのものは天来の言葉と思想と行為によってうち勝たれ、包摂されている。

それ故に私がここに、「聖書より見たる」というとき、それはむしろ独逸語の“ ”（聖書の光の中で）という表現の方が適切なのであって、正に「聖書に照らし見たる」の意である。而もそれはどこまでも私の信仰といったものによって見たるではない。以上のような現実の一切を包摂する驚くべき神劇曲から光する光に照らして見るということは、絶対に「私の」信仰の目で見ることではない。しかもここに確言して置きたいことは、私はそのような「わが」信仰といった主観的な、思いこみの信仰を真の信仰とは見ないということである。「わが」信仰に絶した絶信、「われ」に絶した絶我、私はどこまでも無である、無色透明である、という無的な、立場なき立場にある。これは啓示による思寵の所与の「無」であって、私が修養によってそうなったというのではない。かかる「無」にあっていよいよ、ひたすら無に向かってゆくという動的な相である。信仰それ自体が何ものかであるならばそれは色であって、ものごとをそのあるがままの相に於て認識することが出来ない。聖書を書かしめられた人々の現実は、彼らが無的実存となって神の啓示の言に感動せしめられたという質のものである。その様な現実に於て書かされた文字をして、その本来の光を放たしめ、我が無となってその文字の奥から来る光を受けてゲーテの『ファウスト』を見るというとき、私は透明なにならなければならない。その様な無私無我の境地に於て、聖書の光を以て見るとき、始めて「聖書より見たる」ということがいい得るのであって、私の自覚、否実に覚他はその様な質のものである。以上の様なわけで私に於ては絶信こそが信であって、所謂、「信仰」という何ものかに絶したものであることをここに明言して置かねばならない。

さりとて聖書の外面的な言を規準として、ゲーテがどうのこうのという意味でもない。道学者的なものの嫌いであったゲーテは、実は所謂信仰者よりもはるかに深く、内的に聖書に共感できた人である。かくて太陽が一切を照破しているように、それよりも素晴らしい次元から一切を照破する神の光を反映している聖書の言、無限の奥ゆきをもつ聖書の光に照して『ファウスト』をみるとき『ファウスト』の『ファウスト』たる価値が真に浮かびあがってくるものと思う（扉の「キリストの言葉」参照）。我々が物体をみるとき、の光や石油ランプの光や、ガス灯の光や、電灯の光で見るよりも、陽の光でみるとき最もその物体の真相をつかみ得るのは、陽光が無色透明な絶対的な白光であるからである。それと同様に、相対的な立場に立つ限り『ファウスト』を色眼鏡でみることになり、絶対的な光にこちらが身を投じて、その光に於て体感するとき『ファウスト』の本質と表現が把握されるであろう。かくて「聖書より見たる」とは「無条件的神的現実に於て見さしめられたる」という意味なのである。

「われらは汝の光によりて光を見ん」

と詩篇第36篇の作者はいった。

「ゲーテにとって、光は根源的なものであり、無色なものである。

霊界の神、自然界の太陽が無色透明の光の発光体であるならば、かのプロティノスの言に拠ったゲーテのクセーニエンをよむとき、ゲーテの本質がほぼうかがわれるわけである。

［独文省略］

「眼が太陽のようでないならば、

太陽を見ることは決して出来ないであろう。

我らのうちに神の本来の力がないならば、

どうして神的なものにたり得るであろう。」

即ち創世記1･27に

「神の如くに人を創造したまえり、即ち神の像の如くに之を創造し、これを男と女に創造したまえり」

の「神の似姿」（Selem Elohim = Imago Dei = das Ebenbild Gottes）はゲーテにとって根本命題として体感されていたものであった。彼の偉大な楽天的傾向は聖書のかかる句を彼なりに瑞的に体受しているところから来ている。それ故にゲーテの眼は、心眼は、神的透明さと相通じ、彼の創造力は神的創造力と同質的なものと彼は端的に体感していた。勿論彼は人間の限界をよく知っていたが、量的な限界を自覚しつつも、彼の存在の本質は質的無限性に於てであった。

（４）Edward Spranger： Goethes Weltanschauung. 1949, S.29.

永遠無限なる無条件的なるものに本質的につらならんとする魂は、実は無私、無条件、無心なるもの、これを要するに相対界の相対的存在でありながら、同時に相対に絶したもの、無なるものたらんとする魂である。ゲーテは確かにその様な無私無心的な方向へと限りなく展開しつつあった魂である。それ故にこそマクロコスモスを投影せんとするミクロコスモスであった。無色なる一の露に月影が全的に宿るのである。『ファウスト』一巻は一個の全的人間が、おのれを全的に投じて大宇宙、大世界を劇的展開様式に於て表現したものである。彼自らいう如く、勿論観念や理念の表現ではなく、実存的な現実展開、世界描写である。『ファウスト』こそ遍照する神の光、根源語たる神の言としての聖書の光に照らさねば、これが真価を認識し難き渾然たる現実告白の書である。

# ゲーテ＝ファウストの現実性

［独文省略］

「わがつのもの、遠くに見ゆるが如くして、

消え失せしものこそ、現実のものとはなれり。」（私訳）

ゲーテは１８２３年１１月１６日、エッカーマンとの対話の中でいっているように、「現在」に生命をする心根で生きていた。ところでここではシュレーエル（Schröer）が註する如く「現在」が一応遠のき、青年時代の夢の如き形相が立ち現われて、ゲーテにとってそれが「現実の諸相」（Wirklichkeiten）となって現ずるのである。それは彼にとって「過去」は単なる想い出の過去ではなく、「過去」もまた現在化せしめ、現実化（verwirklichen）せしめないではいられない体験内容である。しかもその「過去」が過去のまま現在化し、現実化されるのではなく、ゲーテの中に於てメタモルフォーゼ（Metamorphose）を起こして、即ち何らかの変質、変形、変貌をなして現実化するのである。それを、私はゲーテに於ては「過去」が「現在」に解脱せしめられるといいたい。

過去の経験や体験がただ過去に消滅するというのでは、体験や実存の内容が昇華されてゆく。即ち「生」を重んじたゲーテにとって経験や体験は消化されつつ、つねに現在の中に融けた要索となっており、それが自由に、新たに芽をふいたり花が咲いたりするのである。「過去」がその過去性から、「現在」の中へと解脱して、現実化するのである。「時」の流れの中から「時」を超克して生くるものこそ、「時」をつかみ、「時」を支配する。

「消え失せしものこそ、現実のものとはなれり」

と詠われている心境は、かかる「時」の超克、「時」よりの解脱をなす現実存者に於て可能である。上掲のゲーテの詩句の意味は、単なる「過去」が現在化するのでもなく、また単なる「現在」が遠のくのでもない。「過去的なるもの」は、それが過去のものであろうと、現在のものであろうと消え失せてゆくに反して、「現在的なるもの」が、「過去」の中から変質変貌しつつ、いよいよ永遠的な質を帯びて現実化するのである。一時斥けられた「現在」もそれ故に決して彼にとっていい加減にすごされるのではなく、「現在」を全一的に経験し体験する彼の中で、「現在」の中から過去的なものがあだかも呼気の如く吐き出されてゆくまでである。

そのような消息は「舞台の前曲」（Vorspiel auf dem Theater）の中で、

「今日出来ないようなら、あすも駄目です。一日だって無駄に過ごしてはいけません。をんで放さぬように、出来そうな事件を決心がしっかり抑えなくてはいけない。

又その決心がある以上は、押さえたたものを放しはなさるまい。

そこででも事件は運んで行くですね。」（225～230）（鷗外訳）

と座長をしていわしめているように「現在」に生き、「現在」を生かす心魂はゲーテの「時」というものに対する根本的態度であった。そしてその「現在」に於て価値あるものは、ぴかぴか光る性質のものではなく、心魂の内奥に深く訴えるたちのものであって、そのような「本もの」が「後世」即ち「未来」にって不滅であるということは、かの有名な詩句、

［独文省略］

「ちょいと光って目立つものは一時のために生まれたので、真なるものが後の世までも滅びずにいるのですね。」（73～74）（鷗外訳）

に見る如くである。

そいつわりなきこと、凡そ浮きたる心気ではないこと、凡そ分裂した気持でないこと、凡そ観念的につくりあげたことでないこと、そういった全身的な、全一的な、幼児の如き、心一杯、力一杯の在り方に対して、具体的に生き、現在を、瞬間を生かすという在り方が、彼の実存の相であった。「現在」にいかにも自然に生きることに於て大自然の如く自然であり、現実であろうとしたところに彼の豊かな、言葉の最も根源的な意味に於ける“”（享受）の面がふくまれていた。「」とは、無限なる生の恩沢のなかにぴたりこれを全心全身を以て受ける態度である。

「崇高なる霊よ、お前はおれに与えてくれた、

おれの願望した一切を。お前の顔を焔の中で、

おれに向けてくれたのは、徒ら事ではなかった。この壮麗なる大自然を王国としておれに与えてくれた。大自然を体感し、それを享受する力をも。

それを訪れてただ冷ややかに驚嘆の目をることを

許してくれたばかりでなく、それの深い胸の中に、

友の胸へのようにして見入ることをも、させてくれた。

お前は生命あるものの列におれの前を

横切らせ、静かな繁みの中、大気の中、

水の中の兄弟たちに引合わせてくれた。」（3217～3227）（私訳）

「崇高なる霊」、地霊にファウストは呼びかけて、

「おのが願望した一切を与えてくれた」

と告白し、その内容として、

「この壮麗なる大自然を王国として与えてくれた。この大自然を体感し（fühlenはゲーテにとっては全身的な体感の角厦であるから、かく申したい）。享受する（genießen）力を与えた」

といっている。地霊は彼に自然を観察する能力のみでなく、実にむしろ自然の深い胸奥を、友の胸の中を見る様に、観入る恩沢を与えてくれた。そして空を飛ぶ鳥、水にむ魚、生きとし生ける万象を見させ、且つこれらのものを兄弟の如く見識ることを教えてくれた、云々という内容の告白をなしつつ、ついに、自己認識をさせてくれて、

「私自身の胸の神秘な深い不可思議が開示してくる」

と告白する。一切を抱き万物を生みだす大地なる母の胸と共感する。大地の偉大な地霊によって圧倒されつつ近親性を感ずるのである。

霊妙なる大自然を体感し享楽し、地水火風の四大に動く万象を観察し、観入するファウストの魂は、外界の内奥を観、且つ感受することが、やがて自己の胸奥を認識し、不可思議が開示することになる。スピノザの“ ”（直観知）と同質的なものであるとしてこのくだりを註しているG. Witkowskiの見解も正しいであろうが、ゲーテ＝ファウストに於ては、もっとゲーテ本来の情感体感の度が強いもので、ゲーテの直観認識は生の現実の体感的体認が、澄明にして熱烈なるゲーテ＝ファウストの眼を通してなされたと見るべきであろう。アウエルバッハの酒場でメフィストフェレスをしていわしめている次の句もまた、自然に対する深い洞察のいかに重んぜらるべきであり、ゲーテ自身の現実存が、時々刻々、日に日に新たに自然に対する驚異共感を技きにしてはあり得なかったことを反映している言葉と見ることが出来る。

［独文省略］

「自然の奥を窺う一目。これが奇蹟だ。信仰なされい。」（鷗外訳）

大自然の胸の鼓動をおのが胸の鼓動の如く体感して親しまんとするゲーテ＝ファウスト的現実存態は、詩篇第148篇に於てヘブライの詩人が、天地の万象に友の如く呼びかけている魂の呼吸と相通ずるものがある。イスラエルの民は大自然を明確に全能なる神の被造物として認識した。しかしそれは単なる「物」ではなく、神の霊言のままに動きまた在り、神の栄光をあらわすもの、神を讃美するもの、一切を生けるものとして深く体感していた。

「竜よ、すべての深淵よ、地よりヤﾊウェーを讃め称えよ、火よ、よ、雪よ、霧よ、にしたがう暴風よ、もろもろの山、もろもろの岡よ、実を結ぶ樹よ、すべての香柏よ、獣、もろもろのよ、這うもの翼ある鳥よ、……ヤﾊウェーをめえよ」（詩篇148･7～10）（更に自然詩として有名な詩篇第104参照）

イエスが、

「空の鳥を見よ、かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりもかにるる者ならずや。汝らの、誰か思いわずらいて身の一尺を加え得んや。また何ゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え。労せず、紡がざるなり。然れど我汝らに告ぐ。栄華を極めたるソロモンだに、そのこの花の一つにもかざりき。」（マタイ6･26～29）

といったとき、自然を貫いて支配する神の恩恵の意志とその力、その生命というものが脈々として共感されていた。そのゆえの天来の生の享受というものは無比の豊かさを以てイエスに於ては体感体現されていた。ゲーテの自然感情、体感の享受の中には──その霊的次元に於てイエスには勿論及ばなかったけれども──質的にはかなりこれに近いものがあった、自然さがあった。観念ではなく、具体性があった。ファウストそのものに於てはむしろこの様な豊かな（享受）が　余り前面には出ていないけれども、その雰囲気は処々に感ぜられる。併しまたメフィストの誘惑のため、罪をはらむ別種のGenußが台頭する危険にさらされる。そのGenußは所謂「享楽」の方向にあって、人間ファウストのうちにとぐろを巻いている根本的衝動として或は超克され或は変質されなければならぬものがある。

［独文省略］

「そいつがあの美しい面影に対する荒々しい火をおれの胸にせっせとる。

こうしておれはなかば欲望から享楽へとよろめき、

享楽のに欲望へとあこがれる。」（3247～3250）（私訳）

メフィストがファウストを堕落させようとする誘惑に対して、ファウストは努力し（streben）、創造する（schaffen）別な根本衝動を以て戦う。現実を「生かす」という積極面がそれであるといってよかろう。努力、創造、行為といったことについては、後に触れることになろうが、その様な「生き」また「生かす」ところに彼の「生」と「実存」の渾然たる相があり、ファウストに於て楽しみながらの努力（genießendes Streben）、努力しながらの楽しみ（strebendes Genießen）といった在り方がいろいろな様態であらわれている。それは正に「現在」をして「現在」たらしめんとする実存態であって、ファウストにとって「時」は観想される静的な怠慢なものではなく、即ち観念的なものではなく、流動的な、体感される現在時に於て生きられるべき「時」であって、正にその「生」は動的なるゆえに、執着されてはならない。

さてファウストのこのような「現在」性、「現実」性は、聖書の世界に於てこそ最も烈しくまたあざやかに存するものである。イエスの

「明日のことを思いうな、明日は明日みずから思い煩わん。一日の苦労は一日にて足れり」（マタイ6･34）

という言の如きは、全く一日を一生として生くる力一杯の生き方であって、前掲の225～230行の句と相照応する感が深い。また曰く、

「わが父（神）は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり」（ヨハネ5･17）

時々刻々を生き且つ働きてやまぬすがたが決してすることでなく、自由なる態度と融合していたイエスの境地は、絶対者の意志によって必然的に、やむにやまれずして動いていたからおのずから生ずるものであったが、ファウストはその境地からは遠いとしても、自然や環境の恩沢を率直に大胆に正直に享受し、それを素材として活用し、創造せんとする衝動はゲーテ＝ファウストの固有のものであった。

［独文省略］「君のような貧弱な悪魔が一体何をしてくれる積もりかね、およそ崇高な精進をいとなむ人間の霊が、

君等にかつてまれたためしかあろうか。」（1675～1677）（私訳）「享楽にらせてたぶらかすことができたら──

それは私の百年目だ、

をしよう」（1696～1698）

「己が或るに、まあ、待て、

お前は実に美しいから、と云ったら！

………………

己の一代はそれまでだ。」（1699～1706）（鷗外訳）

四大（地・水・火・風）から生命力を充分に「享受」しなければ「精進」も創造的展開もできない。併し生の「享楽」に耽ったのでは「活動」は停止し、魂は堕落してしまう。それは破滅への道であり、まことの現実存とは凡そ相反することとなる。ファウストが「瞬間」に向かって

「留まれ！　おまえはいかにも美しい」

といったら、それはファウストにとっておのが「時」の喪失を意味するものでなければならない。ファウストにとって「」が何であるかをこれほど端的に表現している言葉はなく、しかも、この句は全ファウスト劇にとって重大な意味を担うものである。メフィストとの劇的な関わりあいというものが、この「」にかかっているからである。

「現在」を重んずるのは、「現在」に執するためではなく、「瞬間」をつかまえるのは「瞬間」を永遠の「今」として生かすためであって、「瞬間」を傍観して「美しい」と眺めるためではない、「享楽」するためではない。「瞬間」に対して満足して手を置いたら、サタンの勝利となる。ファウストの活動的衝動の停止はサタンのつねに狙っているところである。

即ちファウストにとり「時」は「現在時」の外の何ものでもない。そして「現在」時は、観想された連続時ではなく、現実存さるべき「非連続」時である。「動的」瞬間である。逆説的に申すならば、「非連続」の連続時であり、力一杯に生きる瞬間は、実存的には満足されつつ超克されてゆく。いかなる人間も随伴してくる快感なしに耐え得るものではない。ただその快が目的となるのではなく、随伴現象であって、目的化され、対象化されようとするところにサタンがつけこんで、人間の活動を停止せしめ、「快」「享楽」の奴隷にしようとする。併し瞬間が超克されるとき、後の瞬間が招来される。過去的なものとして「瞬間」がのりこえられると、次の「瞬間」が招来される。かかる動的展開の相にこそ現実存態がある。それ故にこそ、かかる体感のゆえにこそ「享受」（Genuß）と「精進」（Streben）とは相関不離の関係にある。「享受」は「精進」の中におのずから秘められている。人間は単なる「精進」に耐え得る者ではなく、その様な人間ありとせば、それは人間ではない。人間の呼吸そのものがすでに［享受］と「精進」の相関の相をあらわしているともいえる。即ちそれは「」の消息と相照合する。

ファウストのこのような、現在に執せずして現在を生き、生かす在り方は、「生成」（im Werden）（185）の相であり、そのような人間は「生成しつつある人」（ein Werdender）（183）である。真の「存在」、「全的存在」（Sein、vollkommnes Sein）を欲求して精進する者は、「生成的存在」（werdendes Sein）である。「当意」（Sollen）の理念によって「存在」（Sein）に達せんとするのではなく、生命の生成の過程を信じて「存在」（Sein）たらんとするのがゲーテ＝ファウストの在り方である。現在、現実というものがつねに焦点となっている現実存態は質的に永遠性を帯びてくる。未来があるからといって現在を怠る者、過去が美しかったからといって感傷にふける者、それはゲーテ＝ファウストに甚だ遠いものであった。

そのような現実存的な在り方は、実は旧約聖書出エジプト記第３章に記されているイスラエルの神ヤﾊウェーの

「我は在るところの者で在る」（出エジプト3･14、私訳）

“Ich bin, der ich bin”

或は

「私は在る（という者）」（同節）

“Ich bin”

という名に於てこそ、最も端的に表現されている。実にイスラエルの神ヤﾊウェーこそ「実存者」の元祖であるというべきである。それ故に私は「ヤﾊウェー」なる神名を「実存者」又は「実存主」と訳している（注、著者はその後この句を、「私は在りて在らしむる者」と訳している。第一巻『無音キリスト』421頁参照）。

聖書に於て信仰の事態は、実はこの「実存者」たる神を「まこととする」（＝信ずる）ことであって、「実存者」をまこととするとは、実存者に対して「然り」との人格的応答をなすことであって、神が在ることを客体的に認めるとか、信じこむといった認識や思いこみの事態ではなく、人格的応答の事態である。神を信ずるとは、神に対して「汝はまことなり」と告白することなのである。それは自己に対してはむしろ断然と「否」ということである。絶対他者たる神を「然り」というとき、自己は「否」とされて否定されることで、そのような実存的な自己否定、実存的な無化の場にこそ信の奥義が開示されてくる。

ゲーテ＝ファウストの生き方は、このような自己否定の断然たるものとは異なるとしても、現実存を烈しく追求している。魂の現在に対するごまかしのない、いつわりのない在り力、つねに新たに現在そのものを乗り越えて生きんとする衝動に、永遠への片影を見る。永遠は、心の無限な流れに於て憧憬されるものではなく、現在を烈しく生き、現在を質的に──時間的にではなく──乗り越えんとの意志に於てぶつかる次元である。過去をも現在をも未来をもそのの中にする実存の神こそ永遠をっている。ファウストの現実存態がある欠陥をもつにせよ、かかる実存の神につらならんとする──彼自らは意識していない──よき在り方を有っている。ここにファウスト救済の可能性も伏在している。ともあれ、瞬間をのがさず、瞬間に執せず、瞬間を質的に真にとらえるところに永遠がつかまえられる。

［独文省略］

「だが瞬間をつかむ者こそ、

ほんとうの男だ」（2017～2018）（私訳〔註、この「男」は「人間」の意〕）

# ファウストの知的欲求

［独文省略］

「ああ、もう哲学も、

法学も、医学も、

残念ながら神学までも、

熱誠こめてどん底までめ尽くした。

だがこの通りおれは何たる惨めな愚か者ぞ！」（354～358）

「我々が何も知り得るものでないと分っている

それを思うと、この心臓が焼けそうだ」（364～365）（私訳）

悲劇第一部「夜」の場の劈頭の有名な句が告白しているように、ファウストの嘆きはまず知的なものであった。外界も内界も知的認識の対象として観察され研究された。哲学、法学、医学、神学（中世の四大学科）の学的、知的探究を「どん底まで」やってみたが、「だがこの通り、おれは何たる惨めな愚か者ぞ！」と棄て鉢になり、「我々が何も知り得るものでないと分っている」と告白し、「それを思うと、この心臓が焼けそうだ」と嘆息している。

事実学問のを極めたが、知的衝動、探求、欲求の飽くなき追求は、ついに科学的認識界の限界に達して「不可解」という門扉につきあたり、その門扉を開くことが出来ないで、門扉の前に立ちすくんで、「だがこの通り、おれは何たる惨めな愚か者ぞ！」と叫ぶ。人間の側からの真理探究が単なる理性的角度からなされている限り、限界につき当たることを表明しているわけである。その門扉の奥には

「神秘にみちた隠れた智慧」

“Gottes geheimnisvolle, verborgene Weisheit”（コリント前書2･7、メンゲ訳）

がパウロの申す如くあるのである。

ここでゲーテ＝ファウストが「残念ながら神学までも」［独文省略］といっている「残念ながら」「要らんことに」「あらずもがなの…」に於て、神学がゲーテ＝ファウストにとっては「信仰」にはむしろ妨げであるとの意がかくされているように受けとられる。そして766行で

“Das Wunder ist des Glaubens liebstes Kind”

といっているように

「奇蹟というものが信仰のなのだ」

というのであるなら、「奇蹟」は「驚嘆すべきことがら」、理性では判断の出来ぬこと、理性の限界外の事象であるから、そのような「奇蹟」を受けとる信仰は、ファウストが主知的傾向を棄てない限り、きの石である。その前行765行で彼は、

“Die Botschaft hör’ ich wohl, allein mir fehlt der Glaube; ”（765）「福音はなるほど聞いてはいるが、信仰が私には無い」

と正直にいっている。実は信仰がないという前提がある限り、「神学」の研究は、徒らであって、「あらずもがなの神学」と判断するのも無理はない。理性の限界を乗り越えんとの願望がない限り、信仰への飛躍はい。そこにファウストの主知性を一応見なければならない。しかも、理性の世界の外へいかなる心根で飛躍せんとするかに重大な点が存するので、どんな飛躍をしてもそれが直ちに信仰に通ずるとは断じていえぬのである。

併し「信仰」を以て信ずる「奇蹟」の世界も、神智の門扉が開かれると「奇蹟」が単なる「奇蹟」ではなく、即ち人智から非合理や不合理と見えた世界が、理性的な合理を超えた、次元の高い超合理が、驚くべき神秘的合理の世界であることが、無限に開示されてくるのである。「奇蹟」は実は神の大能の業であって（コリント後書4･7）、現象的には類似なものがあっても、その根拠と質と目的とが、所謂「魔術」とは異なることを認識せしめられるのである。「神の霊」「聖霊」を受ければ、その聖き霊の知によって、これが所謂「奇蹟」でないことを知るに至るのである。眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の思いまだ思わざりし所の、神の深き所は、神がこれを聖霊によって顕示する。

「みはすべてのことをめ、神の深き所まで究むる」（コリント前書2･9､10参照）

のである。

それで信仰とは、何か奇蹟を信ずる、といったようなことではなく、また神仏を仕方がないから信ずるといったような思いこみでもない。今ここで直ちに信仰論を展開するわけではないが、信仰は「知」の面から申しても、人間の理性を超えた高次な「知」ですらあることを以上によって一言して置くわけである。所謂論理的理性的「知」に絶するところに始まる真知であると申してよいわけである。この真知の世界は所謂観念でない。それには光とか、生命とか、力とか、愛とかいう具体的な性格が相つらなっている世界である。

一般に当時の「神学」が神の啓示の真理の解明として方法論的に不充分であった。即ち神学するとはどのようなことであるかの掘りさげが不充分であったから、ゲーテが「」とつけ加えざるを得ない理由があったと思われる。人間の理性的な角度から、或は人間の宗教感情の面から、超越界からの啓示の事態を解明することが「神学」である限り、まことにそれは「要らんこと」にふさわしい神学である。併し「神学」がその根拠を、啓示を受ける「み霊」の智慧に置き、そこから展開されるテオロゴスであるならば、それは根本学として、あらゆる理性を超える智慧、神智、霊智として、ミステリオン（奥義、神秘）を語る学として重大な価値をもつといわねばならない。言の最も深い意味での「神学」はむしろ「根源学」といわれなければならぬであろう。何となれば人生と世界と宇宙の窮極の事態を人間の側から解明せんとする哲学、物理学に対して神学は人間存在を超越的啓示の次元からの事態として解明せんとするからである。ゲーテがこの様にファウストを通して思惟の世界の行きつまりを嘆いているその嘆きは正しく亦貴い。近代的思惟の祖デカルトが

「我れう〔故に〕我れ在り」（Cogito〔ergo〕sum）

といったのは周知のことであるが、近代の文化世界の意識はこのように主我的、主知的である。この自意識の原理を大なる体系にうち建てたのはいうまでもなくカントであった。併しカントは周知の如く、人間理性の限界を自覚した。ところでカント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルと展開していった観念哲学に於いて、人間の理性がいかに王者的地位を占めているか。へーゲル左派のフォイエルバッハ、マルクスの流れの唯物史観とも、どこまでもそれは理性が唯物世界原理を肯定してゆく史観であって、中心に理性的人間が立っていることに変りはない。むしろそこでは理性が絶対権をもって人間を肯定している。

その点ではゲーテは理性の肯定者でありながら、限界を知り、ファウストをして理性の限界で如上の如く嘆かしめ、ソクラテスと同じく、「無知」の自覚に立つ。ゲーテ＝ファウストが、ただその限界の門扉を「信仰」の鍵で開こうとせず神智の世界に転入せんとの飛躍をなし得なかったところに、ギリシャ的主知主義の性格を見る。ファウストは祈りと冥想によって理性的な知に絶し、信の世界に躍り込み得なかった。どこまでも観念的思惟を以て人生と世界と宇宙の問題を解決せんとしたファウストが限界につきあたってどうにもならなかったとき、ついに自殺への道を辿ろうとしたのは当然の帰結であった。

「をるるは知識のなり」（箴言1･7）

という言葉によってみるも、人の「知」に絶するところに「真知」への道が通じている。その転換点に畏神というモティーフが秘められている。

「を畏るることは智慧の根本なり、聖者（神のこと）を知るはなり」（箴言9･10）

とある如くである。また

「を畏るるは生命の泉なり、人を死のわなよりれしむ」（箴言14･27）

とある如くゆきつまりを知らないのである。知に絶して、真如の知、智慧に到る道を、悟人し解脱することによってうち聞き、つきぬけたものは仏教である。かかる角度から達し得た最大の宗教である。

併しながら、人間が理性の限界に執し、理性万能的に生きんとし、人間をこの角度からのみ肯定し全権を理性の判断にゆだねんとするとき、社会科学も自然科学も竟には人間と社会をもてあまして行きつまりを来たす。２０世紀今日の様相は例えばその社会学に於て、その医学に於て人間をもてあましているが如くである。

さてファウストの「我れ惨めなる愚者」（Ich armer Tor!）の嘆きを聞いて想い合わさしめられるのは、パウロの、

“Ich elender Mensch! wer wird mich erlösen von dem Leibe dieses Todes ? ”（Luther訳)

「噫、われ悩める人なる哉、此の死のより我を救わん者は誰ぞ」（ロマ書7･24）

である。前者がギリシャ的知的認識界の嘆息であるに対して、これはヘブライ的意志的道念的な嘆きである。人生と世界の苦悩を知的角度から無明としてなやみ、冥想してそこをつきぬけたアーリア人種のすぐれた民インド人が、仏教的展開に救済の道をひらいたのに対して、人生と世界の苦悩を実存の角度からなやみ、意志的苦闘に於て転回飛躍を遂げて救贖の道をうけとったのが、セム人種中の選民イスラエルであった。ゲーテがファウストをしてかく嘆かしめている言葉の背後に、パウロの嘆きの口調がよまれてならない。註解者でこのことを連想している者がないのを私としてはむしろ不思議に思う位である。ルッターの聖書を生涯を通して愛読していたゲーテにとっては、ファウストをしてこの語を告白せしめているとき、パウロの上掲の有名な句が連想されていたであろう。

パウロ的ヘブライ的苦悩は、いかにして神に対して義であり得るか、神の聖なる要求である律法をいかにして満たし得るかの問題で、これに対して自らの道徳的無能力を嘆き、神の意志に、おのが意志を全的に従わせて歩くことの出来ない人間の根本的喪失を罪と感じおのれを「死の」として自覚して叫んだのが「噫われなやめる人なる哉」の声である。ルッターの苦悩が正にこれであった。ゲーテ＝ファウストにとっては、かかる角度の原罪自覚は本質的なものとはなり得ず、ギリシャ的な知的な悩みがむしろ前面に出てそのために自殺自棄せんとする。

さてこの理性的存在の人間はどの様な現実であるかを我々はメフィストフェレスの言を通して見たいと思う。

［独文省略］

「せめてが天の光の影なんぞをやらなかったらもう少しはましに生きたでしょうに。さんはそれを理性と呼んで、どんな獣よりも

獣らしくふるまうことにばかり用いています」（283～286）（佐藤通次訳）

ゲーテはここで「理性」をカント的な意味で用いている。即ち有限的条件的なものにする悟性能力──そしてメフィストはこの悟性的存在として描かれていると一般に註解者はいうが、併し必ずしもメフィストはそうではない。ゲーテはメフィストを通して高度の真理を語らしめている──を越えて無条件的なもの、悟性が知覚し得ない理念界の認識能力となしている。それをメフィストをして“ ”「天の光の影」即ち天的な微光といわしめている。この天的な微光を、天の光の影を、もし神が与えなかったら、人間はもう少しましな生き方をしたであろうに。しかも人間はそれを「理性」と呼んで、自分たちだけがこれを占有し、しかも、どんな獣よりも更に獣らしくなることぱかりに利用しているのだとメフィストはする。そこには併し驚くべき真理が道破されている。「理性」はたしかに「天の光の影」である。絶対界へのポストラート（要請）をなす能力をもっているほど天的な要素がある。併しながらこれは“”微光、外見、仮象であって、「霊」（）の霊性（天的な光を充分に受け入れる能力）に比して次元が低い。即ち「理性」が「霊性」と結ぶことをせず、「感性」と結んで、欲望、自我欲の奴隷となることによって、理性的巧智が人間を個人的、社会的、国際的混乱へとひきずりこんでゆく。自我主張の情意的衝動が「理性」を自由に活動せしめれば、これを大にしては国家的自我主張となって戦争、戦乱への道をとるはであり、人類社会は獣よりも血なまぐさい獣性を発揮するに至ることは今世紀に於てもその生々しい歴史的事実が証明する如くである。「天的な微光」が遂に地獄の鬼火と化するのである。これメフィストの思う壺で、没落破滅へと人を駆り立てんとてメフィストは「理性」を逆用せんとするわけである。

創世記第２、第３章によれば、エデンの東方の園の中央に置かれたは「生命の樹」と「善悪を知るの樹」であった。そして禁断の樹のとは正にこの「善悪を知るの樹の果」のことで、これを喰う日にはアダム・エバは死ぬというのであった。他の樹の果はアダムはこれを「意のままに」喰うことを許可されていた。アダムは何よりも「生命の樹」の果を喰うべきであった。併し、神の許可なくして、換言せば、神意に従うという前提なくして、自意を以て「善悪を知るの樹」の果を喰うことは、理性の絶対化をまねくことになる。それ故にサタンの使者蛇は（エバ）を美言を以て誘惑して曰く、

「汝ら必ず死ぬることあらじ。神汝らが之を喰う日には汝らの目開け、汝ら神の如くなりて善悪を知るに至るを知りたもうなり」（創世記3･5）

神意に従うことをせずして、神にまでなろうとするところにサタンの衝動がある。泡よくば神の御座を乗っとろうとする反逆意志である。驕慢なる知は破滅への道を辿る。

「はに先立ち、誇る心はに先だつ」（箴言16･18）

ファウストは人生・宇宙不可解という知的解決の不可能にぶつかって絶望して自殺しようとした。これはまた旧約聖書の「伝道の書」（コーヘレス）の有名な次の諸句とその絶望感を同じうする。

「コーヘレス曰く、の空、空の空なる哉、すべて空なり。日の下に人の労してすところの諸々の労作はその身に何の益かあらん。世は去り、世はる、地は永久につなり。日は出で、日は入り、またその出でしにぎゆくなり。風は南に行き北にり、旋りに旋りゆきて、風その旋る処に帰りゆくなり。河はみな海に流れ入る。海はることなし。河はその流れゆく処を指して復流れゆくなり。の言用い尽くされて、人なお言い尽くす能わず。目は見るに飽くことなく、耳は間くにつることなし。さきに有りしものはまた後にあるべし、先に成りし事はまた後に成るべし。日の下には新しきものあらざるなり。見よ、是は新しきものなりと指していうべきものあるや。其は我らのにありし世々に既に久しくありたるものなり。前の者の事は、これをゆることなし。後の者の事もまた後に出ずる者これをおぼゆることあらじ。我れ心を尽くしてが下に行わるる諸々の事に就きて、智慧を深く究め、広くめたり。そは苦しき労作にして、神が人の子にさずけて之に身を労せしたもうものなり。我れ日の下に為さるる諸々のを見たり。嗚呼、皆空にして風を捕うるが如し。曲れるものは直からしむる能わず、欠けたるものは数を合わする能わず。我れわが心と語りていう、嗚呼、我は大なる者となれり。我より先にエルサレムに居りしすべての者よりも我は多くの智慧を得たり。我が心は智慧と知識を多く得たり。我れ心を尽くして智慧と知識、と無智を知らんとしたりしが、是も亦風を捕うるが如くなるをれり。夫れ智慧多ければ多し、知識を増すときはを増す」（以上、伝道の書第１章、私訳）

、ファウストの書斎の嘆きとコーヘレス（「集会の司会者」の意）のそれとは相照応している。ただコーヘレスは神を畏るる方向に智の解決のを見たので自殺への道は辿らなかったが、ファウストは人間の限界内での空転の結果自殺しようとするに至る。これを以てしても人間の魂がいかに無限界の絶対境を求めているかを知るわけであり、かかる衝動は万人に実は共通のものであることを、普通は深く意識しないまでである。

この絶望感は

「聞きなれた甘美なが、あの恐ろしい心の乱れからおれをき去り」

に始まり

「葡萄の房の霊液にいあれ！　かの最高の愛の恵みに呪いあれ！　希望に呪いあれ！　信仰に呪いあれ、何にもまして忍耐に呪いあれ！」

に終るところの愛、信、望、忍耐、という如き福音の事態を呪うに至ってまっている（1583～1606）。